

合格体験記

2015年3月卒業生

国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 進学

山梨大学 医学部 医学科 合格

早稲田大学 先進理工学部 生命医科学科 合格

慶應義塾大学 理工学部 学門3 合格

この度、この体験記を書くことができるとても光栄です。ここでは、私がどのように受験まで勉強してきたのか、また勉強面でのアドバイスについてお話ししたいと思います。一人の卒業生の考えとして参考にしていただくと幸いです。

まず学校の勉強ですが、正直、これがすべての勉強の中で最も重要だと思います。確かに難関大の問題は教科書レベルを超えるものが多く、学校の授業だけだと厳しいところもあるかもしれません。しかし、先生方からも同じことを聞いているかもしれませんが、基本抜きで入試問題に手を出そうとしても、ほとんど歯が立たないのではないかと思います。難関大の良質な問題ほど基本事項の応用力を求めてきますので、これは本当に大事です。私の場合は、センター試験、特に地理 B の対策をしているときに、学校の授業の大切さを身に染みて実感しました。センター試験で問われる内容が、中1のときの社会で習った覚えのあるものだったからです。(というよりも、センター試験では学校で習うこと以外は問われません。) もちろん大分忘れてしまっただけですが、予備知識があるかどうかでも、理解力はかなり変わってくると思います。実際にどうしたらいいという方へ、これは一例にすぎませんが、たとえば学校の定期試験の勉強で学んだことを、その先もできるだけ関連付けて勉強しようと心がけることをお勧めします。学校で習うことは、どの科目も連続性、因果関係があるので、前に習った内容を忘れたまま次の段階に入っても、新しい内容が理解できない、ということはよくあることだと思います。(数学の問題が全く分からなくて、答えを見て「こんな公式あったなあ」なんてことはありませんか?) なので、普段の授業で寝てしまって、その授業の内容を一切聞いていなかったなんてことは、その後の授業内容に必ず響くため一番避けるべきだと思います。仮に定期試験で点を取れたとしても、きっと後で苦労することになるでしょう。要するに、塾や予備校に行くとか、難しい問題集に手を出す前に、学校の普段の授業で基礎をしっかりと学びましょう、ということです。また、学校の予習・復習を毎日するのは大変なので、なるべく授業中に理解するように努力するといいです。

もう1つ重要なことは、学校の授業は基本的にどの科目も真剣に取り組むべきだということです。自分は理系だからとか、〇〇大学は入試で理科がいらぬから、といった理由で特定の科目を勉強しない人もいるようですが、高校までの勉強で必要のないことなんてないと思っています。私自身こんな偉そうなことを言えるほど真面目に取り組んできたという自信はありませんが、入試を終えてからよく分かりました。特に5教科7科目もあるセンター試験で高得点をとるには全教科にわたる総合力が必要です。また、ICUのように特殊な入試形式をとる大学では、文系生徒の理科、理系生徒の社会科が問われるので、学校の勉強を基盤にしていなくてかなりキツイです。自分はそういうところは受験しないという人も、教養を持つことはいつか必ず役に立つと信じて、全科目、万遍なく勉強することを強くお勧めします。もっとも、高3の受験勉強追い込み期はこの限りではないかもしれませんが…。

学校での勉強を最優先にするべきだと言ったばかりですが、難しい問題に対応するためには予備校等

の有効活用も非常に効果的です。私は中学の頃からZ会をやっていて、高3の午後科目も予備校のようなものでした。ただし、予備校をうまく活用するには予習・復習が必須ですが、これが疎かになると、予備校の授業を受けただけで終わってしまい、むしろ逆効果だと思います。私自身も高2の2学期に、駿台で土曜日の午後に数学を受けていたのですが、Z会との両立だけでもとても大変で、予備校の課題が終わらないことがしばしばありました。このような予備校の授業が中学の頃から週何回もあると思うととても恐ろしいです。予備校をどう活用するかはもちろん人によって異なりますが、私の場合はZ会と午後科目だけで十二分でした。多くの事に手を出しても、実際に身につかなければ意味は薄いです。

次に、私が高校に入ってから入試を終えるまでの話をしたいと思います。私が本気で「受験勉強」と思って勉強を始めたのは、多分高2の終わり頃、もしかすると高3の夏だったかもしれません。（それまでも勉強はしていましたが、目的はかなり漠然としていました。）はつきりいつて遅過ぎます。しかし、高2または高1から本格的に受験勉強ができる人ってそうそういないんじゃないか、とも思います。そもそも私の場合、受験勉強がどんなものなのか、午後科目で本格的な入試問題に触れるまで、はつきりしていませんでした。だから、高1の頃はとりあえずどこでも、できれば東大理三に入れるだけの力をつけよう、といった具合で、学校の勉強とZ会を図書室で、時には1人でポツンとやっていました。結局理三に入るだけの力は残念ながらつきませんでした。なお、模試についてですが、これはしっかりと受けました。学校の河合塾全統模試以外に、駿台校舎で駿台全国模試を毎回受けました。

その際、高1の時点で欠けている知識があると、当然後々挽回しないといけないのですが、今思うとそのような時間的余裕は受験生にはありません。というより、そのような時間ができることは期待しない方がいいです。そういう理由からも、学校の授業はできるだけ早くから大事にしましょう。

高2からは文系・理系、そして一般入試組と推薦AO組にクラス分け(?)をして、学校としても受験準備態勢に入るわけですが、私にとっての勉強は高1の頃と特に変わりませんでした。ただ大きな変更点としては、新たに物理の勉強が入り、日本史、世界史の授業がなくなったことです。この頃から模試やZ会も難易度が上がり始め、受験までもう1年半か、いや、まだ1年半か、そんな感じで徐々に受験ムードになりつつありました。本来ならこの時点で既に受験態勢に入っておくべきらしいのですが、まだ高校の範囲を習いきっていない中で大学入試を意識するのは、実際にはとても難しく、私にはできないことでした。

高3に入ると早速午後科目というものを受けられるようになるのですが、この時間がおそらく私の所謂「受験勉強」において最も効果のあった時間だと思っています。ここでようやく、入試のために必要な事柄が分かりはじめました。ハイレベル数学やハイレベル化学などは、私の年は受講者が少なく、最終的には1対1の授業になり、私にとってはこの上ない幸運でした。特に数学は、この時間で初めて受験勉強を始めたと言っても過言ではないと思います。実は、Z会の量がかなり多くて、チャート式が数IAで止まっていたのです。高3での細かい話はこの後に書きますが、夏休みからは自分でも分かるほど本格的に勉強し、途中からセンター対策に切り替えたりしながら、入試本番を迎えることになりました。よく現役生は最後の最後まで伸びると聞きます。これは本当だとは思いますが、私の場合は秋までに急上昇し、その先は緩斜面、もしくは横ばいといった感覚でした。（もちろん、個人差はかなりあるようです。）

高3の時について具体的に書きます。上述の通り、高3では午後科目（数学、物理、化学、国語）をとっていました。初めは中国人留学生も受けていて、主に東大を目標とした授業になっていました。どの授業も難しい内容を扱いますが、とても分かりやすく、また受験期のアドバイスも多くいただきました。

た。内容的には予備校のような感覚で、先ほど予備校云々と言いましたが、午後科目は暁星国際の校舎内で授業後すぐに行うため、通学時間のロスもなく、非常にお薦めです。何よりも少人数制なので、先生にとっても細かいところまで見ていただけます。3年では学校の授業でも受験を意識したものが多くなるため、1学期は授業中にそれらを、授業外では午後科目の課題と問題集、そしてZ会をやりました。

夏休みは基本的に友人2人と学校に行き、図書室で各々自習をしていました。私はこの期間を利用して第2校舎のサテライン教室で代ゼミサテラインのセンター地理Bを勉強しました。地理Bの全範囲を90分授業×20数回で終わらせるので、正直スピードがやたらと速く、復習が大変でしたが、とても面白く分かりやすかったです。センターのみの科目が必要な方はこの時期から始めることをお薦めします。因みに地理Bはとてもお薦めの科目です。全科目の中で勉強していて一番楽しかったです。(最後まで点が伸びなかった科目でもありますが…)。また、並行して、「セミナー物理」を使いながら、遅れに遅れていた物理の勉強もしました。化学の勉強は、夏までは「リードα」、夏休みから「化学の新演習」を始めました。もっと早くから始めるべきでしたが、実際この時期になるまで、問題集を進める力が十分についていませんでした。この本は夏休み中に終える予定だったのですが、なんと夏休み中には半分しか終わりませんでした。勉強が計画通りに進まないことなんてよくあるので注意してください。

2学期が始まると、学校の授業はセンターを意識し始めたものになり、午後科目も東大を強く意識したものになり始めました。自分の勉強の仕方も大きく変わり、それまでほとんど開かなかった赤本に着手しました。また、Z会も東大対策のものに変わりました。数学は問題集をほとんどやっていなかったため、最初は過去問がとても難しく思い、赤本でも数学はかなり重点を置いて対策しました。赤本は当然、自分の受ける予定の大学のものを解きますが、初めのうちは順番や時間を気にせずやってみて、難易度や出題範囲の確認、そして出題者の性格(笑)を感じる程度でもいいと思います。(というよりも、いきなり本番を意識してやるのは難しいです。)それ以外の問題集は、化学を10月いっぱいまで終わらせ、物理は電磁気までの基本問題を終えてから発展問題を2周ほど、さらに原子物理を自分で勉強ししだい解いていく、という感じでやっていました。また、東大対策として、先生に古典の補習を1対1でしていただきました。あまりの古文単語の知らなさに自分でもびっくりで、そのときから急いで単語の勉強をしました。古文単語はセンターでも基本中の基本なので、心当たりのある方は早めに対策をしてください。英単語も同様です。さらに、代ゼミのテキスト(夏に使ったもの)で地理Bの復習もしました。個別試験対策は11月いっぱいまでひとまず区切りをつけ、12月前半はすべての勉強時間をセンター対策に費やしました。(学校でのセンター対策補習も受講しました。)12月中旬からは勝手が分かってきたので、夕方までセンター対策、夜は個別試験対策といった感じで、割と計画的に勉強できました。

ところで秋以降の勉強時間ですが、学校のある日は授業後4時半または5時半頃まで午後科目、その後6時過ぎまで図書室で自習をし、家では初めは11時頃までだったのが徐々に伸び、長いときは気が付くと夜中の2時半頃まで勉強し、就寝、6時起床といった感じでした。(私は夜型だったので、早起きしての勉強は不可能でした。)休みの日は朝8時~9時起床、平日同様就寝という感じでした。勉強時間は十分だったのですが、この時間割は夜型以外の人にはお薦めしません。とにかく朝が眠くてつらかったです。しかし、受験勉強を始めると、おそらく寝たくない気持ちが分かるようになると思います。私も初めは12時まで勉強することすら考えられなかったのですが、必要に迫られて勉強時間が自然と増え、最終的には勉強しないと気が済まないというかなり危ない状態にまでなりかけました。皆さんにもぜひ経験していただきたいです(笑)。(もちろん、無理をすべきではありませんが、おそらく自然とこうなります。)

センター対策では、学校で注文票が来た(または来る)と思いますが、駿台文庫のセンター試験実戦

問題集（青本）、パック V と、図書室にあるセンターの赤本、さらには地理 B については Z 会の問題集もやりました。午後科目でいただいた模試の過去問もやりました。このうち、冬休みが終わるまでに青本とパック V を全教科終わらせ、そこから本試験までにセンターの過去問を追試問題も含めて 5 年～10 年分ほど解きました。正直ここまでできるとは思っていなかったです。このうち、過去問が一番効果があるように感じたので、当然ですが、必ずやっておいた方がいいと思います。もちろん、過去問だけでは不十分なので、他の問題集もやるべきです。使う問題集の順番は自分の好みでいいと思います。同時並行してやった個別試験対策では、それまでにできなかった問題はもちろん、すでに解いてあるけれど、気になっている問題の復習もしました。また、既知の問題の解き直しだと答えがある程度分かってしまうため、他の問題集で応用力の確認もしました。センター本試が終わった後は、試験日の順番を意識しながら赤本を進めていきました。本番までに国立後期以外のすべての受験校について、収録されているほぼすべての問題を、少なくとも 1 回は解きました。

個別試験最初の受験校だった東京慈恵会医科大では、数学の簡単な問題につまずき、ショックと焦りで頭の中が真っ白になってしまい、実感通り不合格に終わりました。ここは第 1 志望ではなかったのですが、初めての試験だとこのような事態に本当になりかねないので、第 1 志望の受験の前に、練習を兼ねて最低 1 校は受けるといいです。2 校目以降は、最初の試験とそれまでの模試の経験のおかげで、ほとんど緊張感のない状態で受けることができました。国立前期では東大理二に挑戦しましたが届きませんでした。この時点までに進学先は早稲田・慶應・ICU のいずれか、特に ICU にしようと考えていたのですが、後期日程の願書を出していた山梨大医学部を先生方の勧めもあり受けることにしました。東大入試 2 日目の夜からは山梨大学医学部の赤本に取り組みました。山梨大医学部はまさか本当に受かるとは思っていなかったため、合格の結果が出てから、ICU と山梨大のどちらを選ぶか非常に悩みました。そもそも自分は何のために大学に行くのかが分からなくなってしまうほどいろいろと考えましたが、結果的に ICU に決めました。ありえない決断だと思われる方もおられるかと思いますが、国立後期の結果発表までにほとんど気持ちが ICU に傾いていたこともあり、また、大学に進学する目的について周囲の人々の話を聞きながら、山梨大学医学部学務課まで質問に行ったりして、自分なりに熟考した末の判断なので、こういう選択肢もあるんだということを理解していただくとありがたいです。

因みにそこまでして選んだ ICU についてですが、日本では珍しい教養学部のみ、少人数制で国際色豊かな、教育面が非常にしっかりした大学で、履修科目の選択自由度がとても高い、ユニークな大学です。基本的には 4 年間の計画を立てながら、取得単位の許す範囲内でかなり自由に科目を選択でき、2 年の終わりごろにメジャー科目と言う、いわゆる専攻科目を決めることとなります。現在、私は大学構内の寮で暮らしていますが、学年の上下関係もあまりなく、とてもアットホームで過ごしやすいです。また、英語教育も充実しており、海外留学のチャンスがとても豊富な点も特徴的です。私自身も今年の夏にロンドン大学の SOAS (*School of Oriental and African Studies*) というところに 6 週間行くことになっています。

大学では初めから特定の分野について専門性を深めたい、自分は英語が苦手だ、大学ではたくさん遊びたい、というような人には向いていませんが、大学での学びを最初から専門分野に限定したくない、大学では自ら進んで勉強したい、良質な学習環境を求めている、という人にはとても適している大学だと思います。ICU の入試はとても特殊で、それほど難しいわけではありませんが、しっかりとした対策が必須です。

最後に、私が使った参考書と問題集について少し説明しようと思います。「リード α」と「セミナー

物理」の一部以外は、大体高3になってからやったものですが、できるのであればもっと早くから始めた方がいいです。高3生に残された時間は信じられないほど短く感じます。

- ・物理は学校で配布された「セミナー物理」を、最終的に3周やりました。簡単な問題から難関大の過去問までそろっていて、習いたての分野の確認から実戦演習と、最後の最後までお世話になりました。しかし、もっと難しい問題がやりたいという方は、別のものがあったもいいかもしれません。

- ・化学は学校で配布された「リードα」と、午後科目で紹介された、卜部吉庸氏の「化学の新研究」(参考書)および「化学の新演習」(問題集)をやりました。本当は2周以上やりたかったのですが、時間の制約で1周しかできませんでした。しかし、解説がとてもしっかりしており、参考書と問題集が同じ著者のものなので、とても理解しやすかったです。レベルは高めですが、他の教科のものとは比べても、おそらく私の知っている参考書と問題集の中で一番のお勧めです。

- ・数学は前述のとおり、教科書と午後科目、赤本を活用していて、参考書類はあまり使いませんでした。チャート式は一応お勧めできます。時間が残されている方は是非やっておくべきです。事実、私も高1の頃、2次関数の分野ではかなり助けられました。また、参考書とは少し違いますが、駿台文庫の「高校数学ハンドブック」はなかなか使いやすかったです。文字通り、数学の基本公式が載っているのですが、それに加えて証明や例題がコンパクトにまとまっているので、試験前の確認などに役に立ちます。

- ・古典は、駿台文庫の「古文読解教則本」という、先生に貸していただいた小さめの本が助動詞の訳出などの練習に使いやすかったです。あとは、英語も同様ですが、語彙力とはとてもなく重要なことを痛いほど実感したので、自分では古文単語を分かっているつもりの方も、再度単語帳などで確認するのがいいと思います。(正直国語の参考書についてはあまりよく分かりません。)

- ・東大対策では、駿台文庫の「実戦模試演習 東京大学への〇〇」というものをそれぞれの教科で使いました。これは駿台東大模試の過去問を選別したもので、主に直前期に使いました。

その他は主に授業や補習、Z会などでカバーしたため、これといった参考書は使いませんでした。これらの参考書類は志望校によっては合わないものもあるので、分からないときは先生方に相談するのがいいでしょう。

少し長くなってしまいましたが、以上のことはすべて、私自身が受験勉強を通して実感したことなので考えが偏ってしまったかもしれません。しかし、一番言いたかったことは、いつでも基本事項をしつかりとさせておくことが勉強においても最も大切な事なのではないかということです。また、最終的にものを言うのは個人の努力だと思います。そして、今思えば、12年間過ごした暁星国際学園の環境は、個人の努力次第では受験勉強にとっても適している場所でした。ですから、現在、成績が振るわなかったとしても、才能がどうこうなどと言わないで、基礎を大事に、少しずつ頑張ってください。『あきらめたらそこで試合終了ですよ』って言いますから。

-----